

「話せばわかる」は大嘘

養老孟司『バカの壁』

イタズラ小僧と父親、イスラム原理主義者と米国、若者と老人は、なぜ互いに話が通じないのか。そこに「バカの壁」が立ちはだかっているからである。いつの間にか私たちは様々な「壁」に囲まれている。それを知ることで気が楽になる。世界の見方が分かってくる。人生でぶつかる諸問題について、「共同体」「無意識」「身体」「個性」「脳」など、多様な角度から考えるためのヒントを提示する。

(「Book」データベースから転載)

僕がかつて受けた自然教育プログラム研修での一コマ。僕たち研修生は、一つの窓から同じ景色を見るよう指示された。しばらくして講師の先生から一人ずつ、今何を見て、何を考えていたのか説明するように求められた。ある人は、遠くの山並みを見て標高は何メートルくらいかなと答えた。一人は、街路樹を見て何の木なのか考えていたと答えた。みんな、それぞれ違うものを見て違うことを考えていた。講師の先生はこうまとめた。「同じものを見て、そこから得る情報はそれぞれ違い、とらえかたも違うのです」と。養老先生も似たような体験を書いている。

『バカの壁』冒頭のエピソード。イギリスの BBC が作成したある夫婦の妊娠から出産までを追ったドキュメンタリーを薬学部の学生に見せたときのことだ。「勉強になりました。新しい発見がありました」という感想が多かった女子学生に対し、男子学生は「保健の授業で知っているようなことばかりだ」という感想だった。これは与えられた情報に対する姿勢の問題だと養老先生はとらえた。要するに、男というものは出産に対して実感を持ちたくない。だから積極的な発見をしようという姿勢を見せなかった。

このことは、「自分が知りたくないことについては自主的に情報を遮断してしまっている」ことを示している。同じビデオを見ても女子はディテールまで見て「新しい発見をした」と言い、明らかに男子はあえて細部に目をつぶって「そんなの知ってましたよ」と言っているだけ。「知っている」と言っても、実態はその程度であり、ここに存在する壁が一種の「バカの壁」だ。ところが、「自分たちが物を知らない、ということを疑う人」がどんどん減っている。皆が漫然と「自分たちは現実世界について大概のことを知っている」または「知ろうと思えば知ることができるのだ」と思っているというのだ。さらに、このように安易に「わかっている」と思える学生は、また安易に「説明して下さい」と言いに来るのだという。何でも簡単に「説明」さえすれば全てがわかるように思うのはどこかおかしい、ということがわかっていない。「話せばわかる」なんてことはないのだ、と養老先生は嘆く。

何とも耳の痛い話だ。知ったかぶりはしっぺ返しがかかることは体験的に知っているけれど、「知っている」ことをつい「わかっている」こととしてしまいがちだ。もちろん知識として知っていることは多い方がよいのだろうけれど、「わからない」ことにもっと敏感で、なおかつ謙虚でありたい。そして『話せばわかる』は大嘘だからこそ、決して諦めるのではなくて、自分とは違う立場があることを前提にコミュニケーションをとっていかなくてはならない。この本は 20 年前のものなのに、その価値は色あせていないどころか、この国際情勢をみればまさしくその通りと頷かざるを得ない。

ところで、君たちは今日の授業で、先生の話している内容をもう知っている
とばかりに、窓の外をボーッと眺めていなかったかい？

